

第8期鹿児島県栽培漁業基本計画（案）パブリック・コメント等実施結果

1 実施期間

- ①市町村、漁協等の関係機関への意見照会
令和4年8月10日（水）～8月26日（金）
- ②パブリック・コメント（県ホームページ、地域振興局等での閲覧）
令和4年10月17日（月）～11月18日（金）

2 件数 10件（①7件，②3件）

3 意見の要旨及び県の考え方

（1）種苗の生産及び放流又はその育成を推進することが適当な水産動物の種類に関する事項

意見の要旨	意見に対する県の考え方
<p>時期により漁場にタイが大量に現れ、キビナゴ漁への弊害を起すことがあり、当組合員からは、タイの放流は止めてももらえないかという意見が出ている。計画はタイ・ヒラメの種苗生産量が一番高いが、この先、その他の魚種の種苗生産量を上げ、多種の放流が出来るように検討していただきたい（漁協）。</p>	<p>県としては、国が行う資源調査・評価結果、地域の実情や漁獲量の状況、水産技術開発センターが行う放流効果調査等の結果を踏まえ、多種・少量又は分散放流とならないよう、対象種の重点化に努め、効果的な栽培漁業を推進しているところです。</p>

（2）水産動物の種類ごとの種苗の放流数量の目標に関する事項

意見の要旨	意見に対する県の考え方
<p>昨年度からカサゴの放流を再開したものの、まだ効果の確認ができていない。 令和8年以降もカサゴ放流を計画した時に、10万尾に減じられた数量から、当漁協が要する尾数を確保できるか。（漁協）</p>	<p>次期基本計画の放流目標数量については、過去7カ年間の県内の放流実績と漁獲量（資源動向）等を勘案して目標数量を設定していますので、現在の放流量は維持できると考えています。</p>
<p>第8期の栽培漁業基本計画では、令和8年のクルマエビ放流目標が50mmサイズ、15万尾となっているが、当漁協では放流効果を高めるために、平成27年度から平均70～100mmの大型の種苗を夏季に放流している。放流目標のサイズを大型化した方が良いのではないか。（漁協）</p>	<p>種苗を大型化することにより、初期減耗を低減させ、放流効果を高めることは重要であり、現行の第7期基本計画期間中も一部の地区では60mm以上を放流している実績もあることから、放流目標サイズを50mmから60mmに変更することとしたい。</p>

<p>ヤコウガイが早期に実現できたら有り難いです。(漁協)</p>	<p>ヤコウガイの種苗生産については、奄美群島水産振興協議会において今後の取組について協議されており、奄美群島水産業活力向上プロジェクト事業を活用して、ヤコウガイの採卵試験に取り組んでいるところです。</p> <p>県水産技術開発センターでは、ヤコウガイ種苗生産技術マニュアル等に基づき指導し、技術向上の取組を支援することとしています。</p>
<p>ヤコウガイの種苗生産に関して第7期と同じ計画を立てられているが、5年以上進展がないものを8期ではどうしていくのか、7期との相違点をお聞きしたい。(漁協)</p>	<p>奄美地区における種苗生産試験は、思うような進展は見られていない状況ではあるが、奄美群島水産振興協議会を中心に協議が継続され、令和4年度は採卵試験に取り組んでいるとのことでした。</p> <p>県水産技術開発センターでは、ヤコウガイ種苗生産技術マニュアル等に基づき、地元で種苗生産が可能となるよう、取組を支援することとしており、第7期と同様の計画としました。</p>

(3) 水産動物の種苗生産及び放流並びに水産動物の育成に関する技術の開発に関する事項

意見の要旨	意見に対する県の考え方
<p>スジアラについては、奄美海域以外に県本土域でも要望が非常に高まっており、地元としては非常に期待が大きい魚種であるので、技術開発は早急に対処してほしい。(種苗生産機関)</p>	<p>スジアラについては、現在、県水産技術開発センターにおいて、種苗生産技術を開発中であり、生産した種苗については、奄美海域へ奄美の各漁業集落が放流して、その効果を確認しているところです。今後も種苗生産の技術開発に努めます。</p>
<p>三島村周辺海域にもスジアラを放流したいため、種苗生産の増産をしてほしい。(漁協)</p>	<p>スジアラについては、現在、県水産技術開発センターにおいて、種苗生産技術の確立に取り組み中であり、今後も種苗生産の技術開発に努めます。</p>
<p>ヤコウガイ、シラヒゲウニに関して、平成27年に種苗の生産確立がなされたということで種苗生産が一度終了している。その後、奄美群島水産振興協議会、奄美群島市町村長会、</p>	<p>県としては、ヤコウガイ、シラヒゲウニについては、平成27年度までに水産技術開発センターにおいて種苗生産技術を開発し、種苗生産マニュアルを作成して、生産技術</p>

<p>奄美群島市町村議会議長会の要望により、シラヒゲウニの種苗生産は復活したが、ヤコウガイに関しては再開の目途もたっていないように見受けられる。</p> <p>基本計画によれば、種苗生産の確立は技術開発段階においてBの量産技術開発期、もしくはCの放流技術開発期にあたると思われるが、なぜ種苗生産が終わってしまったのか。</p> <p>(漁協)</p>	<p>は確立したと考えています。</p> <p>今後は、種苗生産に取り組む奄美群島水産振興協議会に対し技術支援を行っていく予定であり、地元の要請があれば、種苗生産、放流体制の確立を目指した取組を支援していくこととしています。</p>
---	--

(4) 水産動物の放流後の育成、分布及び採捕に係る調査に関する事項

意見の要旨	意見に対する県の考え方
<p>魚種によって放流する場所、時期の周知徹底をお願いしたい。効果がない可能性があれば、放流する場所、時期の見直しも検討して欲しい。(種苗生産機関)</p>	<p>放流種苗の生残率向上のため、種苗生産から放流の一連の技術開発を一体的に行うとともに、放流対象種の馴致放流試験の実施や検証等を行うことにより、放流効果の向上に努めてまいります。</p>

(5) その他

意見の要旨	意見に対する県の考え方
<p>天然種苗と人工種苗では、マダイは鼻孔連結、ヒラメは腹の黒化が、人工種苗の可能性が高いとのことだが、カサゴの判別方法はなにか。(漁協)</p>	<p>カサゴの判別方法については、過去の知見では鰭抜去等により放流魚を識別し、放流効果の把握に努めた事例があります。</p>